『随想』

秘密のマツタケとり

桧垣七郎
（会員・佐伯市下久部岡ノ谷）

秋の訪れとともに朝夕は肌寒さを感じるようになり、稲の穫入れも終わりに近づく頃になると、朝の散歩をしながら私の胸に浮かんでくる一つの想いがある。

それは、篠崎公園の例のところに、もしかしたらマツタケが生えているのではないかというひそかな期待である。

六十年前のあの頃と現在とでは、地形も林相も変わり、マツタケがあるはずもないと思いながらも、やはり「無い」と断定したくない気持ちが強い。

私ひとりの、幼い時の郷愁にも似たささやかな夢を失いたくないからであろう。

勤め人だった父が、松林を散策中に偶然に見つけたものか、それとも予備知識があって探し当てたものか、マツタケ発見の糸口は父の亡い今は知る由もないが、篠崎公園のマツタケはわが家の者だけが知る秘密であった。

秋も深まる頃になると、父は末っ子の私を朝早く篠崎公園の現場に連れて行ってくれた。

たばこ山から流れ下る水が、狭くて深い谷を形成して清六池の小池の方に注ぐ所に、赤松が自生した斜面があり、松林の中には水神様を祀った石祠があった。

そこには、ところどころにアセビなどの低小木やシダなどが疎らに生えており、水成岩の混じる赤土の土壌は松の落葉でおおわれ、辺りには独特の自然のにおいがあった。

私は父の後に従いながらマツタケ発見の方法を教えられた。

傘の小さい若いものはなかなか発見が難しいが、大きく傘の開いたものは、附近にほのかな香りを漂わせて、淡い褐色の傘に松の落葉を被りひそやかに立っている。

それを発見した時の胸のときめきは今でも忘れ難い。

度々父について行くうちに、私もマツタケのありそうな場所がわかるようになった。

一番期待できるのは水神様の石祠の後あたりであり、

また深い谷のすぐ上の斜面である。

まだ傘の開かない幼いマツタケは、腐葉土で弾力のある地面から僅かに頭を出し、その上に被さった松の落葉がかすかに傾斜をなしている。その見えるか見えないほどのマツタケの頭を私が目敏く見つけることも多かった。

しかし、そんな小さなものはその時はとらずに、毎日観察に行って存在を確かめ、成長の度合いを見て適当な時期にとるようにしていた。

中でも思い出に残る一番の収穫は、水神様の石祠の後の藪際で私が見つけたものであったろう。

雨あがりの朝の清浄な空気の中に、ほのかな香りが漂い、近くにマツタケがあるらしい予感はあった。

父と附近をあちこち探すうちに、小さな木とシダの葉にかくれるようにして生えていた、傘の直径十二～三センチもある大ものを私が探し当てた時の嬉しさは、生涯忘れられないほどのものであった。

その日の夕食に母から吸物を作ってもらって家族で食べながら、私は「これは俺が見しけたんぞ」、と兄や姉達に発見のいきさつを繰返し語って得意満面であった。

父が行けない時は私一人か兄と二人で行き、近くに人影のないのを確かめて現場に入る。

親分肌で大ざっぱな四つ年上の兄に比べて、神経質で注意深かった私の方がマツタケを見つけるのは上手であった。

松の落葉を被り、根元に僅かに赤土のついた香りのよいマツタケを、大事な宝物のように隠して、村人達の目に触れないように持って帰るのが常であった。

マツタケが生える場所のあることを、誰にも知らせないためである。

もっとも、秋の多忙な農作業に追われる村人達にとっては、マツタケの存在などあまり関心のないことであったろう。

そのマツタケの生える場所も、昭和十五年頃、村人達による清六池の堤防の補修工事の際に、松の木を切り倒し、赤土を堀って堤防に運んだために、その斜面の大部分が削り取られてしまった。

私は、自分の家の座敷を土足で踏みにじられるようなうら悲しい思いでその工事を見ていた。

それ以後は、篠崎公園でマツタケをとった記憶はない。

土木作業で松の木が切られ、附近の土地が踏みにじられたために生えなくなってしまったのであろう。

その後、終戦の前年の秋、久部の山に砲台を築くために登った海軍の兵隊が、山の松林でマツタケの群生を見つけ、手に持ちきれずに上衣に包んで持ち帰ったという話を聞いた。

その場所はわからぬながら、胸のわくわくするような話であった。

かつて久部には、篠崎公園の他にも、人に知られることもないままに、マツタケが年々生え継いできた松林があったのであろう。

時代の変遷とともに山林の手入れをする人も無くなり、松林も戦後のマツクイ虫で大方は枯れてしまった久部の里から、本当にマツタケはもう消えてしまったのだろうか。

僅かに残る赤松の木を見るにつけ、どこかにまだ生え継いでいるような気がして、ひとりひそかに夢を抱くのである。

表紙解説

医王山長楽寺（本匠村大字上津川）は一名井ノ内薬師ともいわれ、大同三年（八〇六）の創建とされるが、江戸時代の初期にはひどく荒廃していた。一説には切支丹大名宗麟に焼かれたともいわれる。

やがて享保の中期に入り、この寺に参詣した六代藩主高慶の意により、瑞祥寺（同村大字因尾）末庵として寺堂の造修が進められ、それ以来、佐伯藩三大薬師（他に蒲江と津久見）の一つとして、藩主・領民の篤い信仰を受けるようになった。戦後になり堂主が去るなどして一時その衰退が心配されたが、最近地元住民の努力により新しく堂宇が整備され、再び参拝者の数が増えている。

表紙の写真は、この寺のご本尊薬師如来像である。木造で、高さは六〇㌢ばかり、「衣文にやや繁雑な手法が見られ、全体に鋭く、都ぶりの明らかな作風を示す。製作年代は江戸時代中期頃。」（岩男順――宇佐歴史民俗資料館）といわれている。この仏像の珍しい点は、内部がくりぬかれ、その中に別の仏像（胎内仏）を蔵していることである。（別掲写真）

なお、このほかに中品上生印の阿弥陀如来像、不動明王立像、毘沙門天立像、弘法大師座像などがあるが、いずれも江戸末期の地方的で素朴な作風が非常に印象的である。

解説　矢野　徳弥